ISSN 0388−5569
VOL. 18 No. 3
(通巻54号)
1997. 12

Library News

山口大学附属図書館報

目次

図書雑感 …… 1
図書館と本と書庫 …… 3
バイト生が考える、図書館のもったいない話 …… 4
本学関係教官寄贈図書 …… 5
人事異動 …… 6
日誌 …… 7
トピックス …… 7
おわび …… 8

図　書　雑　感

附属図書館工学部分館長　田　中　正　吾

NHKで、いま長州にゆかりのある大河ドラマ「毛利元就」が放映されている。私とNHK大河ドラマとの付き合いは、既に19年になる。山口に赴任する前の年に、今は故人となられた司馬遼太郎氏原作の「花神」をみたのが初めである。花神とは、日本語で“花咲かじじい”のことである。時の蘭学医であった長州の村田蔵六(後の大村益次郎)が官軍の総指令官となり、全国各地に文化(新体制)の花を咲かせてまわることから、このタイトルを付けたとのことである。また筆者の母校が、高杉晋作を指令官とする長州藩に悩まされ、その結果陣地を後退し、そこに新しい藩(豊津藩)を作った小笠原藩の藩校(育徳館)であったことから、今思えば、ここ山口とはそのときから若干縁があったことになる。

ところで先ほどの「花神」であるが、中村梅之助氏の好演にもよるが、それまで大学受験のため歴史的な知識を頭に詰め込んできた筆者にとって、歴史とはこんなに面白いものかと大きな衝撃を受けた記憶がある。それからというものは、時間さえあれば(というより、時間をやりくりして)鎌倉時代から明治までの歴史小説という歴史小説をむさぼり読んだ。客員研究者としてドイツに長期滞在していた間も、毎週、日曜日にデユッセルドルフにある日本人クラブの図書館を訪れ、誰にも邪魔されず、1日中好きな歴史小説を読み耽ったものである。とくに、司馬遼太郎氏の作品は、ストーリーがしっかりしていて、かつ日本人の原点、日本のあるべき姿を示唆しているという点で大好きである。

このようなわけで、日本の歴史に強い興味をもつようになり、学会などで各地を訪れた際、勢い、時間の許す限り史跡を訪れるようにしている。そして、史跡にたたずまいながら、その当時のことや人物に想いを馳せながら、人間の弱さ、強さ、人生のはかなさ、あるいは日本のあるべき姿など、いろいろ自分勝手に思索することにしている。　若者の活字離れが言われて久しいが、テレビ、電話、ビデオ、また最近では巷におびただしい携帯電話など、情報機器の発展によるものである。しかし、情報を単に受け身で得たり、あるいは論理構成もしっかり行わず、思ったことを即座に表現する刹那的な生き方では、いざ文章を書こうとすると、筋道立った文章が書けるはずはない。本拙文を読まれている学生諸君も、卒論、修論、学位論文などを書くときに後悔するのではないかと思う。

ちなみに、大学界隈の食堂に足を踏み入れると、食事が出てくるまでの間、あるいは食事中、一心不乱にマンガに読み耽っている学生諸君の姿が大勢眼に入る。これなどは良い方で、中にはカバンにマンガを入れ、堂々と授業に持参する強者もいる。これが、最高学府で勉学に取り組もうとする学生の姿なのであろうか。いくら大学が大衆化してきたからとはいっても、やはり将来の日本を背負っていくこと

が期待、あるいは義務づけられているのが、国立大学生と筆者はまだ思っている(いや、思いたい)。ここは、是非、将来の日本を双肩で背負ってやろうという位の意気込みが欲しい。このような気構えを身につける一番の近道は、やはり何といっても読書ではないかと思う。先達の凝縮された知識、後輩に残したい忠告などが満載されているからである。

私の研究室に、福山市と総社市出身の学生がいる。残念なことに、二人とも地元の史跡については無頓着、無知である。たとえば、福山市の学生に、福山城は一時誰の居城であったか尋ねてみたところ、天保の改革で有名な水野忠邦の居城であったことを知らない。もちろん、長崎の目付けで、表向きの石高よりも実質的にはるかに裕福であった唐津藩から、貧乏藩の福山藩に移封を願い出た動機もわかる筈もない。一方、総社市出身の学生に備中高松城の水攻めについて尋ねてみたが、地元なのに、見学はおろか、その事実さえもほとんど知らない。秀吉の水攻めに会い、城中の兵士の命と引き換えに、湖上で切腹して果てた若き当主の清水宗治が当時の城主であった。彼の辞世の句は、「浮世をば、いまこそわたれ、もののふ(武士)の、名を高松の苔に残して」であった。当時の武士の潔しさを思う。日本の舵取りを任せたのに、主義主張は何のその、政党を出たり入ったり、あるいは縄張り争いにうつつを抜かしているとしか思えない(ムラ社会の)いまの政治家の諸氏に深く味わって欲しい句のひとつである。

潔しさと言えば、因幡(鳥取)の城攻め(又もや秀吉による)も忘れられない。草の根一本までも(実際は人肉までも)食いつくすまでの激しい攻防戦の中、命惜しさに部下や援軍の毛利家兵士を残し、夜陰に紛れてこっそり秀吉に投降した城主の山名豊国。このとき、援軍として毛利より派遣された吉川経家は、戦いを続行し、草一本無くなるのを待って、城中の者全員の助命と引き換えに、30才前後の若さで潔く切腹して果てた。因幡城入城に際し、自分用の首桶を持参するほどの決意であったという。当の豊国(後の禅高)は、その後秀吉のお伽衆(話相手)の一人となり、高齢まで生き永らえたとのことである。一方、権勢を誇った秀吉の晩年は、皆さん良くご存知のとおりである。豊国の行動を皆さんはどう思われますか。部外者の立場からは批評は簡単です。「もし自分が当事者であれば・・・」と、たまに筆者は馬鹿な空想に耽ったりもします。それにつけても、“時代が時代”といえば話にもなりませんが、清水宗治や吉川経家の潔しさには教えられるところが多いと思います。

ところで、豊国は死を迎えるに当たり、吉川経家の数倍も生きたという実感を持ち得たでしょうか…。ここに人生のはかなさが潜んでいるのではないかと思うのです。

結論が遅くなりましたが、学生の皆さんに言いたいことは、史実を直視することにより、人生のはかなさが浮き彫りになってくるということです。「だから、適当に生きてやろう」というのではなく、「だから、短い人生を有意義に、おもいっきり生きてやろう」と考えて欲しいのです。そのためには、マンガ以外にも、知的な書物をたまには読み、先人の忠告を聴き、深く人生を考えてみることも必要ではないかと思うのです。なにも、哲学の本を読めというわけではありません。歴史小説のように気安く楽しく読める本でも、読めば必ず、人生の指針や糧となるべきものが得られるはずです。身近なところでは、あるいは、文章の構成力や創造力が身につくかも知れません。とにかく、狭い世界に閉じ篭もらず、大きな世界観をもち、有意義な人生が送れるよう、今からでも読書を生活の一部に取り入れてみてはいかがでしょう。

最後に、学生諸君を奮起させる史実をもう一つ。明治維新前夜の鍋島(佐賀)藩および薩摩藩は、当時の日本きっての先端的技術集団であったことは、皆さんよくご存知のとおりです。とくに鍋島閑叟率いる鍋島藩はすさまじく、欧米列強からの植民地支配に神経をとがらし、欧米の文物を緊急輸入し(あるいは長崎に派遣するなどして)、部下に各分野のエキスパートたらんと、叱咤激励した。このときの武士は、各人が冶金、大砲、火薬、等々の各分野をひとつずつ当てがわれ、各人が現在の大学教授何人分もの勉学をしたのではないかと思われるほど、その集中力たるや想像を絶するものであったらしい。一方、宇和島藩に蘭学医として一時招かれていた村田蔵六に当地で見い出された一人の職人(提灯作りを生業としていた。名前を嘉蔵という。)は、与えられた蒸気機関の設計図と日夜格闘しながら、ついには日本人の手による日本初の蒸気船を作り上げたという史実を突きつけられるにおよび、我々現代人の無力感を感じざるを得ないし、かつ混沌たる世界に身をおいている現在の我々にどうあるべきかを問いかけているような気がしてならない。

いくぶん押しつけがましくなりましたが、学生諸君には、とにかく読書を通じ、全智全霊を打ち込んだ先達に少しでも思いを巡らし、有意義な人生を送って欲しいものである。

図書館と本と書庫

山口大学人文学部人文社会学科人間論コース４年
木戸川啓多

僕は書庫が好きだ。

書庫には古い本が多い。中には何十年も人に読まれていない本もあるのだろう。かび臭いような、体がかゆくなるような、何とも言えない匂いが漂う。それは本の体臭だ。本の経てきた年月の匂いだ。その匂いを呼吸すると、本が身近に感じられる。

とは言っても、本は沈黙したままだ。本は自分の方からは決して語りかけてはこない。そこがテレビや映画などとは違うところ。僕たちは自分から本の中へと飛び込まなければならない。それは、面倒くさく、時には苦痛でさえある。でも、いったん本の中に入れば、そこには外からは窺い知れない世界が広がっている。その世界との出会いが本の一番の魅力であり、面白さだ。世界を持つのは何も小説だけに限らない。哲学、自然科学、評論、あらゆるジャンルの本が世界を持っている。読者はその世界の中を動きまわり、戯れる。一冊の本には一つの世界がある。だから、図書館は様々な世界への入り口でもある。しかも、僕らはその世界を無料で借りられる！

本を自分からは読む気がしないと言う人は、本を教科書としてしか読んだことのない人なのではないだろうか。本を教科書として読むとは、本に世界を求めることを拒否し、情報を得るために読むことだ。そのような目的で本を読む人にとっては、世界などむしろ邪魔なのだ。けれども、ただ新鮮な情報を手に入れるという目的のためには、本はそれほどふさわしいものではないし、これからはもっとそうなるだろう。他のメディアがすごい勢いで発展、普及しつつあるからだ。もし本が生き残るとしたら、それらの情報の沈殿場所としてだろう。社会を駆け回った情報は、やがて古くなるとその価値を失い（と忙しい人たちは考え）、ゆっくりと人々の記憶の底へと沈んでいく。その内の幸運ないくらかは本へと沈殿し、積もり、世界へと組み立てられる。そんなふうにして出来た世界は時代を越える。すべての本が、とは言わないが、良書は年月を経ても世界を開放し続ける。本が生き残るとしたら、情報が世界へと変質して落ち着く場所としてだろう。

書庫はそのことを実感させてくれる。本とその中身（世界）とは一緒に年を取るからだ。そこが電子図書などとは違う。書かれていることが同じなら、本も電子図書も変わりはないと言う人もいるかもしれない。けれども、僕たちは本の活字だけを読んでいるのではない。活字の周りの空白も併せて読んでいるのだし、更には本そのものを読んでいるのだ。だからこそ「本を読む」と言う。例えば、パソコンのディスプレイに映る文字を読むならば、それはディスプレイを読む、それともパソコンを読むことなのだ。だから、たとえ書かれていることが同じでもそれらの間には歴然とした違いがある。もし僕たちがこのことを忘れ、本をただ単に技術の発達という流れの中での不完全な情報伝達の手段と考えるならば、やがて本は姿を消すだろう。

だからといって図書館では本のみを扱うべきだと言うつもりもない。むしろ、文化、教育、文芸全般に積極的に関わっていくべきだと思う。本のために図書館があるのではなく、人間のために図書館があるのだから。それからまた、図書館は自らを情報や知識に対して開いているのと同じく、外部（利用者）に対しても自らを開かなければならない。そうすれば知識や情報は社会を循環する。その循環を促進するのが図書館の主要な役割なのだ。「開かれた図書館」こそが学問を活性化する。図書館はいつの時代にあっても情報や知識の集まる場であらねばならぬし、その情報や知識を、求めるならば誰にでも提供するべきだ。

これまで長い間、本がその目的を最もよく荷っていた。でも図書館は、もしそれが時代の要求ならば、本に固執する必要はない。もちろん図書館は今、そのように変わりつつある。山口大学附属図書館も利用者のために様々な改善が行われている。コンピューターの増設やシステムの改善、インターネットの導入、ゲートの設置、等々。僕はその中でも書庫の開放時間延長がいちばんうれしい。閉館時間まで開くようになった書庫で、薄茶色に変色したごわごわのページをめくりながら僕は思う。本には明るさより暗さが、騒がしさより静けさが似合う、だから本は嫌われるのかな、と。

バイト生が考える、図書館のもったいない話

山口大学大学院人文科学研究科地域文化専攻１年
秋 吉 淳 一

今回は山口大学附属図書館について、実際にその中で働きつつも決して内部にどっぷりとは浸り切っていない中途半端な立場から、なぜか一般にはそれ程知れ渡ってはいない図書館の情報やサービスについて話していこうと思います。（以下は主に山大図書館本館がベースになっています）

はじめに、平日の夕方５時半以降と土日に、学生が非常勤としてバイトに入っているという事を皆さん御存じでしょうか。山口大学の図書館は、工学部・医学部の分館を含め、職員の勤務外の時間に学生をバイトとして雇っています。かく言う私もその一人として週三回図書館に勤務している非常勤職員の一人なのですが、この事を知らない人は案外多いのではないでしょうか。というのも、ここだけの話、バイトの人選にあたっては公募は一切行なわれておらず、代々研究室の先輩から後輩へと「引き継ぎ」が行われているからなのです。（尤も、私は何のコネもなく、ひたすら２年間空きを待っていましたけれど）。そういう理由で、図書館のバイトに学生が入っているという事は、それに採用されている若干名と、土日や、平日の５時半以降に図書館をよく利用する人以外にはあまり知られていないと言えるでしょう。

他にも一般に知られていないことがたくさんあります。自分が探している本が貸出中だった時、次に借りたいと思ったら「予約」ができるということをご存じですか。それと、探している本が「研究室貸出」になっていた時、それだけでもう借りるのを諦めてはいませんか。ほとんどの人がそこでもう探す努力を止めていると思いますけど（あなたはどうですか？）当然借りることはできます。参考調査係の人にその旨を告げれば、その本を持っている先生にアポを取り、その研究室まで取りに行けるよう取り計ってくれるか、または後日取り寄せてくれます。

私自身常々感じる事ですが、この参考調査係の人に分からないことを聞くということをしない人が多いように思われます。分からないことがあれば参考調査の人にドシドシ聞きましょう。せっかくその道のプロの人がいるのだから、利用しないのはもったいない事です。他にも自分の興味がある論文を調べたいとか、調べた後で実際に手に取って見たいが山大にはない、という時には参考調査係の人にその旨告げましょう。何とかしてくれます。大丈夫です。山大にない本も論文も、それがどこかの図書館にありさえすれば取り寄せてくれます。そして、もしも自分で他大学に資料を見に行く時に、その図書館が部外者を入れない図書館である場合には紹介状も書いてくれます。これさえあれば大抵の図書館に入館できます。

それに加えて、今年の八月から教官・院生・職員の方に限り、手続きさえ済ませれば年末年始を除きほとんどいつでも自由に図書館を使えるようになりました。手続きのまだな方はこの際手続きをしてみてはどうでしょうか（但し、貸し出しはダメで、どんなに暑くても寒くても空調機器は一切動かないという不便なところがありますけれど）。

今述べたのは図書館サービスのほんの一部に過ぎませんが、冒頭でも述べたように、なぜか図書館サービスは一般にあまり知れ渡っていません。なぜそうなのか、というその主な原因を考えればいつも同じ結論に突き当たります。つまり、山大の図書館はサービス提供の表明に消極的じゃないのか、という事です。もちろん職員の人はそんなことはないと答えるでしょう。というのも「図書館利用案内１９９７」という青いパンフレットが常時貸し出しカウンターの前の棚に置かれていて、その中にはほとんどのサービスが書かれてあり、そのパンフレットを手に取って読める人なら原理的には図書館利用について、何の障害もないことになるからです。しかし、残念ながら私の回りの学生で「図書館利用案内１９９７」を読んだという人は一人もいません。そしてかく言う私も、じっくり読んだのはこの文章を書くための必要性に迫られた今回が初めてのことです。

「図書館利用案内１９９７」は実際良くできています。本館に関して割かれたのは１２ページですが、私の見る限り、コンパクトで非常に分かり易い内容で、じっくり読めば図書館の機能やいろんなサービスの情報が簡単に得られます。しかし、そうであるからこそそれを置くだけで他に目立った行動を取らないなら、消極的だと考えられても仕方がないと言わなければならないでしょう。実際この考えを推し

進めると、質問しに来た人に「何でもかんでもパンフレットを見れば載っているんだから、それを読めば図書館のことは何でも分かるでしょう！」と答えることにもなりかねません。もちろん、そうなってはおしまいですが。

それと同じようなことが図書館のホームページにも言えます。インターネットで図書館のホームページに入れる人は、そこから図書館のいろんな情報やサービスの内容を得ることができます。しかし、勿論それ自体はサービスの一つに過ぎないわけで、決してそれだけで図書館サービスの全てが賄えるということにはなりません。それに、確かに図書館のホームページは時代に乗った素晴らしい情報媒体だと思いますが、私のみる限り図書館のホームページを開いたからといってサービスを求める利用者の数が急激に増えたとは到底思われません。ならば、結局事前にサービス内容を知ってもらうということだけでは不十分で、それにプラスアルファが加わって始めて利用者サービスの充実が実現する、という事になるはずです。それが何なのかは私自身これから考えていかなければならない課題です。

あとがき

私がここで言おうとしていることは非常に単純です。図書館のいろんなサービスを知り、その利益を受けることは「良い」ことで、それをしないのは大変「もったいない事」なのに、その「もったいない事」をしている人がたくさんいる。中にはサービスの存在を知ってて受けてない人もいますが、問題はサービスの受け方を知らないばかりにどんどん「知りたいこと」を諦めている学生です。それはとってももったいない事をしているのだと思います。ですから少しでも多くの人にいろんなサービスの受け方を知ってもらって、その利益をできるだけ受けて欲しいと、ただそう願うだけなのです。

本学関係教官寄贈図書

（平成９年６月～平成９年１１月）（受入順）

［本館］

松尾善弘（人文学部教授）
- 唐詩の解釈と鑑賞＆平仄式と対句法　松尾善弘著 近代文藝社　1993
- 批孔論の系譜　松尾善弘著　白帝社　1994
- 漢語入門　中国語初級テキスト　文法編　松尾善弘著　白帝社　1993
- 漢語入門　中国語初級テキスト　発音編　松尾善弘著　白帝社　1994

貞木展生（名誉教授）
- 所得循環と資金循環　貞木展生著　日本経済評論社　1997

上野修（人文学部教授），入不二基義（教育学部助教授），
- 哲学者たちは授業中　入不二基義，上野修[ほか]著　ナカニシヤ出版　1997

桒原昭徳（教育学部教授）
- わかる授業をつくる先生　桒原昭徳著　図書文化社　1997
- 親を語る：私を育てた家庭教育　桒原昭徳著　山口大学教育学部桒原研究室　1997

渡辺幹雄（経済学部講師）
- 西洋政治思想史Ⅱ　藤原保信[ほか]編　渡辺幹雄執筆　新評論　1995

山本真弓（人文学部講師）
- 世界の先住民族　ジュリアン・バージャー著　真実一美，山本真弓[ほか]訳　明石書店　1992

湯川洋司（人文学部教授）
- 山の民俗誌　湯川洋司著　吉川弘文館　1997

植村高久（経済学部教授）
- 制度と組織の経済学　河村哲二編著　植村高久[ほか]執筆　日本評論社　1996
- 現代世界経済システム：変容と転換　河村哲二，柴田徳太郎編　植村高久[ほか]執筆　東洋経済新報社　1995

・制度と資本：マルクスから経済秩序へ　植村高久著　御茶の水書房　1997
田中正吾（工学部教授）
・基礎電気計測　田中正吾編著　朝倉書店　1995
・知能化計測の基礎と応用　田中正吾著　アイピーシー　1997
・制御工学の基礎　田中正吾編著　森北出版　1996
・計測システム工学　田中正吾著　朝倉書店　1994
豊澤一（人文学部助教授）
・徂徠以後：近世後期倫理思想の研究　子安宣邦研究代表　豊澤一[ほか]執筆
　課題番号　60301006　昭和62年度科学研究費補助金（総合研究Ａ）研究成果報告書

［医学部分館］
松崎益徳（医学部教授）
・心機能を知る　松崎益徳編　文光堂　1994
・実践臨床心臓病学　松崎益徳[ほか]編　文光堂　1997
福本哲夫（医学部教授），澤田知夫（医学部講師），徳田信子（医学部助手）
・解剖学者が語る人体の世界　福本哲夫[ほか]著　日本解剖学会編　風人社　1996
河合伸也（医学部教授）
・エッセンシャル整形外科学　腰野富久[ほか]編　医歯薬出版　1994
・整形外科学・外傷学　東博彦[ほか]編　文光堂　1995
・整形外科外来診療　小野村敏信[ほか]編　南江堂　1995
・標準リハビリテーション医学　上田敏[ほか]編　医学書院　1986
・リウマチ入門　アメリカ関節炎財団編　日本リウマチ学会　1996
・医用高分子材料　医用高分子材料編集委員会編　学会出版センター　1981
・The Textbook of spinal surgery. v.1 ／ Keith H. Bridwell : Lippincott-Raven　1997
・The Textbook of spinal surgery. v.2 ／ Keith H. Bridwell : Lippincott-Raven　1997

［工学部分館］
田中 正吾 （工学部教授）
・基礎電気計測　田中正吾編著　朝倉書店　1995
・計測システム工学　田中正吾著　朝倉書店　1994
・知能化計測の基礎と応用　田中正吾著　アイピーシー　1997
田中正吾（工学部教授），山口静馬（工学部教授），和田憲造（工学部教授）
・制御工学の基礎　田中正吾編著　山口静馬，和田憲造[ほか]共著　森北出版　1996

人　事　異　動

［配置換］（9．10．1）中　川　秀　夫　情報管理課受入係（情報サービス課運用係）
（9．10．1）河　本　香代子　情報管理課目録係（医学部分館運用係）
（9．10．1）西　垣　昇　治　医学部分館整理係（情報管理課受入係）
（9．10．1）中　村　繁　子　医学部分館運用係（医学部分館整理係）
（9．12．1）松　本　郁　子　情報サービス課運用係（情報管理課目録係）

日　　誌

［本　館］

9. 3～5　第３８回中国四国地区大学図書館研究集会（高松）
　赤間工学部分館整理係長　三好相互協力係員　田中受入係員

10.16～17　平成９年度国立大学図書館協議会中国四国地区協議会実務者会議（高松）
　吉光参考調査係長

11. 5　学術雑誌総合目録欧文編１９９８年版全国調査説明会（九州大学）
　田中受入係員

11.20　平成９年度中国四国地区国立大学附属図書館事務部課長会議（広島大学）
　渡邊事務部長　堀内情報管理課長

11.25～26　第１０回国立大学図書館協議会シンポジウム（神戸大学）
　赤野運用係員

［医学部分館］

7. 4　日本医学図書館協会資料保存委員会（大阪）　上田整理係長
7.14　医学部分館図書委員会
7.22　高校生施設見学
8. 8　医学部分館図書委員会
9.25　医学部分館図書委員会（持ち回り）
10.24　日本医学図書館協会資料保存委員会（大阪）　上田整理係長
10.30～31　日本医学図書館協会中国四国部会総会（島根）　岩戸運用係長

［工学部分館］

9.11　図書･研究報告委員会
11.11～14　平成9年度大学図書館職員講習会(大阪) 渡壁(整理係)

トピックス

☆第２回医学図書館業務研究会

昨年に続き、医学部分館主催で県内関連病院図書室との業務研究会を去る８月２日（土）分館内に於いて、県内８病院、内科医師２名を含む８名の参加で、開催した。

内容については、午前中は相互協力、特に文献複写業務の実務的な説明と状況報告、病院図書室からは厚生省医療研修推進財団について説明があり、特に病院図書室間文献複写オンラインオーダーリングシステム“VML”（バーチャル・メデイカル・ライブラリー）の運用について報告があった。また、午後は、やさしいインターネットの活用についてと題して、実習も交え講習を行った。終日、分館、病院図書室双方が熱心に密度の高い研修を行った。

（医学部分館整理係長　上田照賀）

☆本館２４時間開館スタート

図書館に対して、近年サービスの拡大、とりわけ日曜開館並びに平日の開館時間の延長等の要望が寄せられており、これに応えるため業務の合理化を図って、今年４月から日曜開館を実施していますが、利用も着実に増えて、その効果があがっています。

一方、定員削減の続くなかで、どんなに合理化しても、人を配置したサービスには自ら限界があります。そこで、自動化を推し進めた形でのサービスの拡大を行うことにしました。その第一弾が、本館での自動入退館システムを導入した無人時の利用も可能な２４時間開館を平成９年８月１日から開始しました。これは、教職員・大学院生を対象に緊急時の研究支援を一層強化するために導入したもので、通常の利用スペースと同様に全館を開放して資料の閲覧、情報検索、文献複写等を通常の開館時間以外にいつでも利用できるものです。開始して３ケ月の状況は、山口地区をはじめ宇部地区も含めて全学から利用申込みがあり、１０月末現在で170名が登録されています。登録人数も徐々に増えております。また、一日当たりの最高利用者数も日を追って増加していますが、更なる利用を期待しています。このような、総合大学の中央館で全面開放による24時間開館をスタートさせるにあたりまして、関係各位のご理解とご支援をいただきましたことを大変感謝しています。幸い、これまで約３ケ月の間事故もなく利用されておりますが、今後とも一層緊急な学術情報収集に役立つよう活用されることを願っています。

年末年始の休館について

１２月２６日（金）17:00から１月５日（月）8:30までの期間は、特別利用（２４時間開館）が出来ませんのでご了承下さい。

お　わ　び

1997年８月発行（Vol.18 No.２）のLibrary News（山口大学附属図書館報）の本学関係教官寄贈図書の記載の中に間違いがありましたので、お詫びして訂正いたします。（訂正箇所は＿＿＿。）

誤	正
立山紘毅（経済学部助教授）	立山紘毅（経済学部助教授）
・現在メディア法研究＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿	・現在メディア法研究：憲法を現実に作動させるファクター
利部聡（農学部助教授）	利部　聰（農学部助教授）
・動物生殖機能実験の手引き：憲法を現実に作動させるファクター	・動物生殖機能実験の手引き＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿
辻井弘忠編．．利部聡[ほか]執筆	辻井弘忠[ほか]編．．利部聰[ほか]執筆
白水完児（農学部助手）	白水完治（農学部助手）
・家畜の．．．経営改善	・家畜の．．．経営改善
保坂虎重、白水完児他著	保坂虎重、白水完児[ほか]著
添田健次郎（人文学部教授）	添田健治郎（人文学部教授）
・日本語アクセント史の諸問題	・日本語アクセント史の諸問題
添田健次郎著．．．	添田健治郎著．．．
関　一雄（人文学部教授）	関　一雄（人文学部教授）
・一の坂川姫山国語国文学編集．．．	・一の坂川姫山国語国文論集．．．
増田正勝（人文学部教授）	増田正勝（人文学部教授）
・現代．．．川崎文治博士．．	・現代．．．川﨑文治博士．．

編集・発行　山口大学附属図書館　広報委員会
〒７５３　山口市大字吉田１６７７－１　TEL:0839-33-5183　FAX:0839-33-5186
E-mail:toshokan@po.cc.yamaguchi-u.ac.jp